

# 創作ダンス「旅する小さな家」—思惟の庭—

2014年11月9日 ヒアシンズハウス前庭



創作ダンス:①「旅する人」振付・出演:江積志織 ②「地喜」振付:榎川真理子、出演:多田直子・榎川真理子 ③「レイヤー」振付:桜井陽、出演:海保文江・藤井彩加・上村有紀・東伊都美・桜井陽 ④「二つの場所で起こること」振付:愛智伸江、出演:愛智伸江・高橋純一

「旅する小さな家」と「ヒアシンズハウス」、この二つの小さな家は戸口を向き合わせて建ち、小さな前庭を共有していました。その日、この前庭はいつものお散歩広場から「思惟の庭」へと変貌しました。

11月9日、4人のコレオグラファー(振付家)によるダンスパフォーマンス「旅する小さな家」は、別所沼公園(さいたま市)のなかにあるこの前庭を中心に上演されました。はじめの作品「旅する人」(振付:江積志織)では、ダンサーが「旅する小さな家」の高さ60センチの戸口から這い出し、地面を転がり、ふたたび這いつくばり、もがき、歩みだし……、そして「人は、なぜ旅に出ようとするのか?」という問いかけを、見ている人びとの心に落としていきます。

次の作品「地喜」(振付:榎川真理子)では、2名のダンサーが二つの家の住人に扮します。彼女たちは小さな庭の中で踊りつつ、相反する感情をあわせ持ちながら営むたわいのない日々を表現していきます。観客のさまざまな心は、ダンサーの抱く複雑な心とともに小さな庭から広い空へと解放され、その後、両者の視点は穏やかな営みにもどされていきます。

三つ目の作品「レイヤー」(振付:桜井陽)では、音楽の流れとともに空間は都会の町ようになり、二つの小さな家は空々しい硬い建物と化してしまいます。5人のダンサーは、その街を生きいきと行き交うように踊り、どこを目指すともなく進み続け、最後には

もっと広い世界に向かって歩み去ってしまいます。残された観客ははじめて、この二つの建物のある空間に疑問を抱くのです。

すると、そこに一人の女性が「ヒアシンズハウス」の窓を閉め、ゆっくりと周囲を確かめるようにして外に出てきます。家を出て人びとと交わるために、あるいはたった一人の人とつながるために……。これが最後の作品「二つの場所で起こること」(振付:愛智伸江)のはじまりです。いろいろな疑問や思い、決断をくだしながらダンスは進行していきます。やがて、ダンスは女性から男性へと受け継がれ、小さな庭を訪れた男性は片方だけ靴を脱ぎ、土と露と草を受け入れて思惟の世界へと入ります。

この4作品による45分間のダンスパフォーマンスに立ち会いながら想ったのは、「ヒアシンズハウス」を設計した立原道造は、この場が人びとの思惟する場に変貌することを望んでいたのではないかと。今、私が述べたダンス作品の解釈は私個人のもので、振付者の意図とは違うかもしれません。ともに見ていた皆さんとも異なるでしょう。しかし、それぞれの人がそれぞれの背景と夢を心に秘め、インスタレーションや自然、パフォーマンスの中で思惟の世界を泳ぎつつ得た感想は、立原道造のみならず、多くの芸術家が目指す心の宝珠なのだと思います。

計画当初からたくさんの人びとの思惟が生まれ、思惟の庭を創り上げたこのイベントを、貴い出来事として記憶にとどめたいと思います。  
藤井香(SMF運営委員)

# ワークショップ 小さいお家をつくろう

2014年7月29日・31日・8月2日 入間市博物館アリット、東野高等学校

子どもたちを対象とした工作のワークショップでは、ふだん家庭や学校で体験できないことを思いきりやってみるのが理想です。そして、おとなが用意したものを、子どもたちが予想もしなかったような形にしてくれるのがなによりの楽しみです。

今回の「小さいお家をつくろう」は、これまで入間で取り組んできた子ども対象ワークショップとしては、もっとも“大きいもの”をじっくりと作るワークショップでした。3日間かけて、子どもたちがすっぽり入れるお家づくりに挑戦しました。

たくさんの家を作る敷地は広びろとした入間市博物館の庭。お茶室の池のほとりの芝生には、ここちよい木かげがいくつもできています。子どもたちもすぐにお気に入りの場所を見つけました。

作業場は東野高校の、天井が高く、風のとおり大きな多目的ホール。炎天の日の作業にはうってつけのスペースでした。ふだんは木の家を作っている設計士本橋裕基さんと、DIY講師の嶋崎都志子さんが指導、東野高校美術部員や顧問の先生方も手伝ってくださいました。

家の材料は、5つに折りたためる白いプラスチックダンボール。小学生にも加工しやすく、移築が簡単と想定していましたが、これは大きな誤算でした。小学校3年生から高校生まで32名が各自1軒を建てる予定だったのですが、高校生たちは2軒作った後、自分たちの材料を小学生に提供し、小学生たちの希望をかえらるべく、つきっきりでサポートしてくれました。

- 一星のかたちにしたい。
- 一風が吹きぬけるようにしたい。
- 一屋根から空が見えるようにしたい。
- 一中からひもを引いて戸を開けたい。

夢はどんどんふくらみ、家もどんどん大きくなり、最終日には作業場から500mほど離れた敷地に一棟ずつ軽トラックで運ぶことになってしまったのでした。

思いおもいの向きに建てられた白い小さいお家の集落は異国の村のようで、子どもたちがそれぞれの家をまわって歩くようすは絵本の1ページようでした。家の中にはちゃんとテーブルが置いてあったり、レコード盤がまわるプレイヤーまでそなえてある家もありました。子どもたちはご満悦で、地元ケーブルテレビのインタビューにも自分の家のみどころをしっかりと説明していました。

子どもの夢にふりまわされての楽しい3日間でした。(参加:計90人)  
山尾聖子(SMF運営委員)

## 【嶋崎都志子さんから】

「いつもなにげなく暮らしているお家を自分で作ったら……」となげかけて、紙の模型で子どもたちに住んでみたい家をイメージしてもらいましたが、はじめはちゅうちょしていた子たちもどんどん乗ってきました。ふだん、あまり触ったことのないプラスチックダンボールでの立体化をなんなく進めていくのを見てると、子どもたちの創造性には心配することはなにもない、と改めて実感しました。ただし、家の強度や難所クリアーに関しては高校生たちのサポートがたいへん助かりました。

ほんの何歳か離れているだけなのですが、「創造の小学生/知恵の高校生」のよいコラボができたと思います。



あなたとどこでもアート  
小さな家プロジェクト